

12
17
24

三七八傳
南柯夢
十三

122
17
24

三七全傳

占夢南柯後記

第二篇

東京圖書館

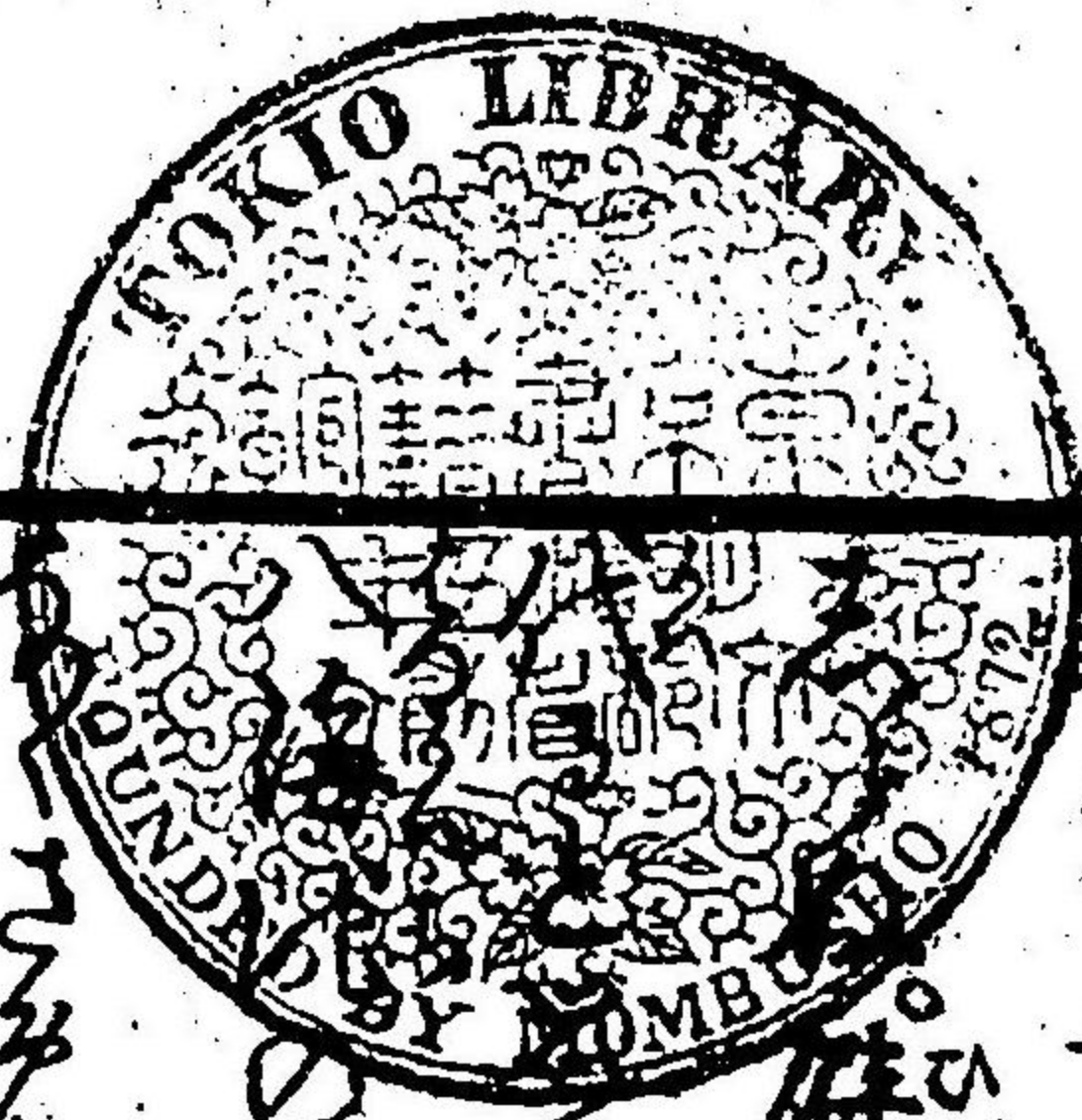
一	16	5	3	小	和書門
七	四	2	六	記	
冊	號	架	函	類	

三七全傳 占夢南柯後記卷之四ノ下

前帙第四

明治十年交換

東都 曲亭馬琴編次



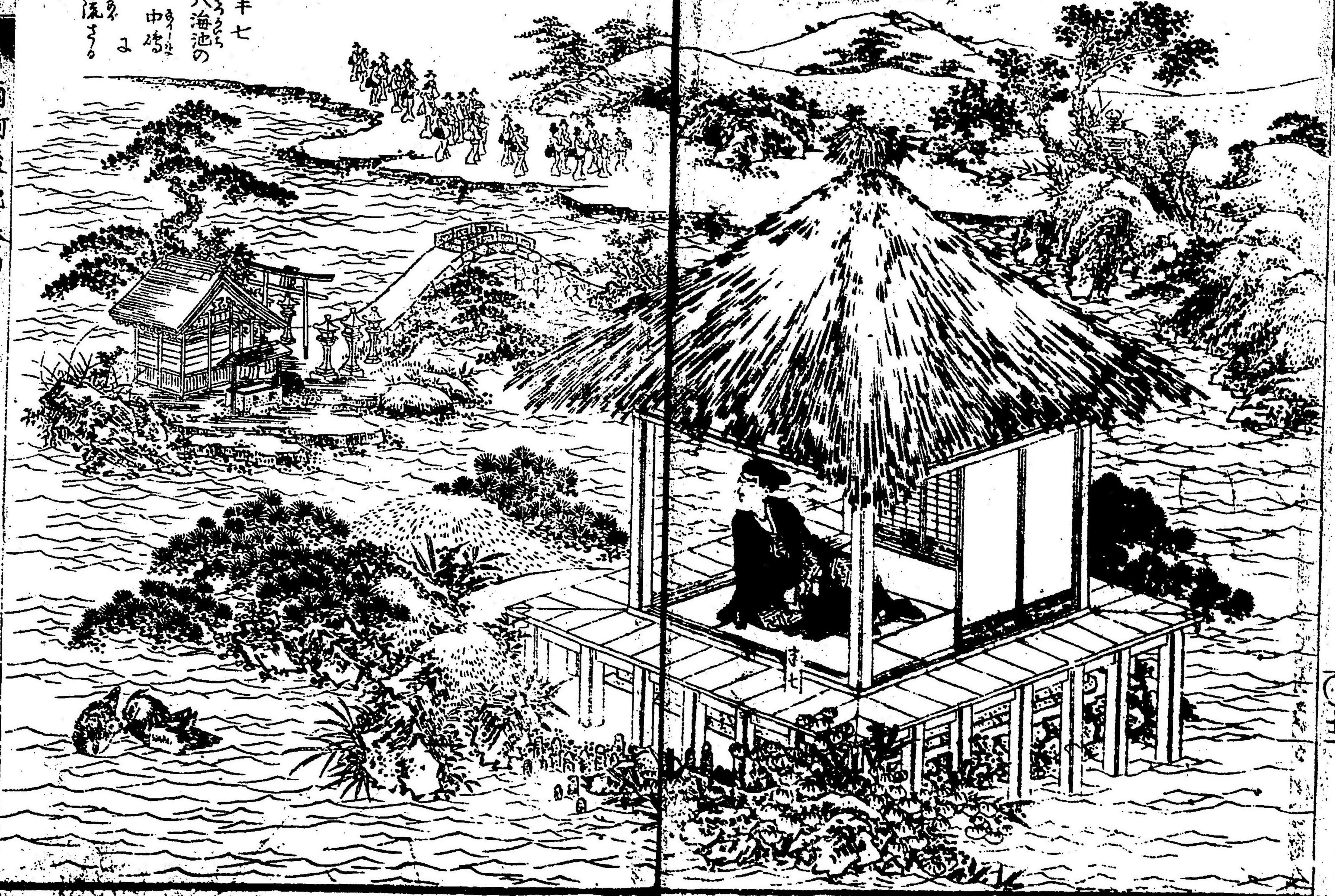
罪多て配所の取せんといひ。大官人との和歌の浦。夜出由
^{ひがと} 俳言あらん。不題赤根半七の罪多れ罪と家大人よ。
^{あはれ} へばらししせぬ。秋風乍。假初るがら九十餘日。
^{あやま} の中流る。四阿は因まて。とて配所となりてワごも。
^{ねが} 難一寢寢する。抑九山八海の波と吹え一。當時
^ま 鹿苑院の義満公。洛北は金園を造る。退隱の花とて。山吹の
^ま 美景を尽さる。あう歌よ永正のそめ子。至て順勝の又。続井順照
^ま 良茶の風流を嗜むのあま。彼金園は。撰へて。三十餘町の後苑よ。

ころろ五町の池を穿せ池の中より二ツの塔を築きてこれを鏡湖の
 池に擬へば中の奇石の夜泊石亀山赤松畠山九山八海石小
 至るやその面影をうらむや。かぞへ八海池と名づけしや。り。
 かく莊親と云ふとくも。驕をよせば牙の仇多く。一景の難
 いで亦うらむ頃昭をためてその非を睡り。享禄二年の春のころ
 彼茶亭とて毀れんと東南の築嶋あり。辨天堂と池の中は
 るの四阿のそとがやうは残されり。頃昭えま辨財天と云ふく
 信ト多し。いへば彼築はふ築る反橋をたへ今頃勝の時よめ。
 かく終覆志多ども。北の池の橋もあく。彼四阿のあつら
 簷鼻傾て萱が棟も。只としくみ朽まら。月より外ありのり。
 袖の涙と透間より秋風のもぞ青つ。あつこの塔の松の青。

時の羽がた百羽がたかきとんぬぬおひと。米七の官小
 又のう母の敷。うらが身よもめてうら悲しく。池の波風り後
 とおふ君の怒のやうだて。親の親居ゆ。とせのいと遙あつこの
 築たす。辨財天と祈。のそえ木桐をたると。春の樹立よ
 遮られて中池より人教もええと。月月のこの日毎玉枕は前
 内庭傳ひ。影の女房女の童とおて。毎天堂へまのめを。
 外よりうらなま。悼とあり。は瑞ちうく。日よ三夜の
 餉と。管圍より奴隷と。捨と。その舟と。あつこの春よ
 教もだてあれ。浪のかうい。路度結と。と。遙か念と。わの
 ちる。一池の中より。女幼天へ。あつた。は。び。び。近くて。遠
 りの。鞍馬の九。わ。う。や。清少納言が書。と。宜。あ。彼。首。

百本後言者四十一

半七
八海池の
中
流



南村後言著

四

小舟より移り身を数多く囚徒と近くて遠く津垣へ
 運ぶ。越ゆるぬれと形あり世吹脚つ。五月廿一日より。こよあまこ
 四箇月も餘つて。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 する月の三日の限。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 らん宝刀の往方とあらう。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 病著るや。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 期さけ。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 空や水ある。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 の移り。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 小ざが枝のうら。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 至誠の神の如く。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ

ろうらん。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 智恵聚不可稱量。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 々よりして。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 彼知の舟と夜の中に。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 の人と。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 験んせ。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 一十月の。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 玉枕。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 あま。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 と。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ
 多抗。つとぬ月日ゆゆく秋の九月廿日よりなり。こ

顔と撞つ白く糸いと子ことめて黒くろ髪かみの顔かほもゆる糸いとうんんきりり。後お堂く正ま聴りと隔へききががよよかかるる外そと父ちち公こうののううんん笑わらくくよよううめめくくははるるし。
 於お夏なつのの敷しきすすててららのの鼻はな月づきのの下した院いん行ぎやう首くびのの清きよはは因いんここいい。
 かんかん身みががるるのの糸いとははくくよよけけひひららんんよよつつけけてて胸むねくくううくく。夏なつのの日ひくく。
 帝みかど蟬せみののささらら裳かみ脱ぬてて羽はね單たんええぶぶ笑わらままししててららののくくをを交まじりりすす。
 この中ちゆう堂どうへへ内ない廳りやうままのの中ちゆう供くわうくくままののとと遠とほ外とほはは觀かん中ちゆうのの。
 四し阿あよよかかままささひひらら陀だつつめめんん鬼おにがが清きよ筆ふでのの果はるるがが。
 かのかのととわわくくままごごよよんんままぬぬ敷しきををららせせ。如ごとかかららのの花はなの中ちゆうのの。
 いいままのの海うみああらら緑ろくのの幼こ稚ちよよ。秋あきののああせせ婦むすめ夫をとこままれれとと。
 后ごう所しよ隔へてて給たまふふささらら新あらたとと合あははれれのの間ま限かぎの中ちゆう垣かきもも。
 結むすぶぶ綱つな手てののああららああらら三さん指ゆびのの花はなももさされれととらら夏なつ愛あひひ。

外とほ天あま公こうのの男おとこ君きみああるる方かたがが平へいのの家いへのの艱い小こ夏なつ癖くせのの牙はのの。
 細こまくく秋あきとと春はるとと女に郎らうをを身みつつのの袖そでのの露つゆのの身みららごご別わかれれてて清きよののとともも又また環わん会かい。
 女に郎らうをを身みつつのの袖そでのの露つゆのの身みららごご別わかれれてて清きよののとともも又また環わん会かい。
 後のちのの世よはは憑よりりてて井いへへ朝あさをを夕ゆふをを合あははれれとと合あははれれとと。
 頃ころも月づきのの給たまははるるににせせどど局きやうああのの夜よああははららははててらら。
 ろろのの辨はん財ざい天てんへへ理りるる願ねがひひととりりままくくもも。せせのの人ひと月づきのの園えん松まつのの。
 糸いとのの深ふかくく階かびび先まへををややとと人ひとととんん由よし毎まい房ぼうとと戸と鎖さ。
 ああれればばゆゆめめののああららとと甲か夜よのの物ものはは珍めづししききとと生なままががああららんん。
 ととららががままのの心こころはは病やまひのの卧ふし房ぼうとと脱ぬぎぎてて。
 堂どう丈ぢやう夫ふのの人ひとととんんががああららのの男おとこ姑めかけををああららのの。
 ちちののああららのの風かぜもも廻まわるるのの松まつのの聲こゑはは又また千ち世せすすててまま七しちねねのの。

世のこの後の世もさしてと背向のえせを面背のいのりの断り極
 断おひてぞ行結願の今昔をさし後この中堂までおんまはあひん
 辨財天女の備のいよやばけんそのつらうを彼知する水と流りて
 諸のいひのこのの迷ひよう拒格のいひまじで真の丈夫のいひぬ
 うと疑へば又今更は憐れと憐れと撫さむてまう退れり伏はめがせ七
 びて歎息し結ぶるそのの婿まされども生塵そのをさすのせん
 といひのいひこそめくまむとをなせる物諸女子とくを夜を抱し
 七びびく通つんと浮る馬とらおゆるえび赤の志されり
 くれも又親とさく牙と志し辨財天女と違拜して又の厄難
 除るもづくの徳育の舟とく寄せ一扇糸清るにめもと夜にけり
 垢離と執禱の目教の化はたちとけの十日の夜は終絶令天女も

感納しぬぬ物と公若しと辨れさしん分て小雲時同睡得よ
 舟の中流ふ流きまの原素念願空めととて飛する小舟ふ
 棟しとまの中堂へ請まびとらばも吾妹ふ環会つ縁由と
 問はすかれも等し。階はまある丹誠苦ゆいひあせねと合るの成
 災厄消除疑ひす。まののれど武士の家おはる男女の私を席を
 共のせはゆきやられの因後におん牙も又病ありとして肩は糸をり
 るがら笑を裁て階出さく流るのさるるで吾儕と真愛昔は相法と
 今ある人さしんもの若ものいひ世の誤後みんかこれとて
 親の罪をさるるであんてく下向さるう。これゆもや退れん
 いひつまをいひて頃日の夜の長は暮してやい問のあつり
 誰待りしやんがれりや。と違へたららるるで會話とばゆら

笑くまがら一羽の夏を耐えんべしお母はなや。おん承の今迄二十二の
年より弱くせんえもど女まの強よ更易く二十より弱く
暮るるまきに年の浪よおとらふまの嬉しくもあつて嬉しむ君と
これ。ひとりよけらば浦の馬が一夜の齡老ぬも何ううらみん夜
徒び逢ん侍計の行かうあやまきうらみんはしつと叩きてまゆ
つれよあやゆつち。後面入えのまど。おん承のいもこれとありあ
つれよ又親のいも念とるあよけいあまの縁さうりなる婚姻を流
まじくまふごかくのいづらん情とえまふぬりの恨もせんが親よ
代らぐ死なすの辞せむら果の妻あつらふあつら情ぬ余も情まて
よさき死にむせんは身ゆらんのまじかむ。年のまなまゆひれ。
縁の時節とまらあまはしつらぬいもは沈むをむもさうりのも
傷らぬと考はしむも愛はままも合し舞の舞うらともの死
める死考とさうら。さうらほよの徳のらん云早そら妻てふ
りの死婚姻せむは縁とまふむや。と強面と怨ぢれが半七を
今更あつらひ腹を言のたも勅のまをゆるへ。洗ぬる前面の
樹立の間より燈燭のまの閃くとさう生つ。前より滑川の枕枕
りては右の鞠うひらる。子燭照る途と照らせぬ築島の反橋と。
聖然と足音さう。とよいして来ぬま。玉枕清三羽小なむ
やうん。さ時さぬ物諸ひぐさど。とまむも。初花も周草早
群隠まんとさうど。一條ある築嶋すれは橋より外
路のま。まかせまむや。まかせと胸うらみ。幾いぐさうら海と
いせせんはむあつら。

浮世の婦人

浮世の婦人の女房の燭を扱て堂内なる男女をんと大に小
 驚かす且くおん先を脱めぬ堂内小癖者の階へ戻るなりと
 咄まが玉枕の前へも戻りて「お床元をさへせ曾太郎」と
 言はせりいふ遣後方ひける様松の阿と交りて袴の積をとり
 するがらおん前へ来りよけまが玉枕の前言詰正しく如此のよめ
 ありとつりて検見よと宣へば曾太郎着てゆ燭を把ては堂の
 内なる癖者をひりくふ引出し燭を扱てつうくえまがは
 淫すこの癖者の外怪すとて女中初花より一ふ且怒り
 且怒り恥をとりぬぬ大自物主を蔑 刺状の面泥と塗る浮世の
 癖者のと罵る声のいふと云う扇を揚げて打たせんとて玉枕の前
 へも

て集禁めよと宣へば仲太助も仰へば「此れを切ぎ腰に巻く
 上は怒の涙よりくる身の名も半七も初花も玉枕も平伏て置くぞ
 迷る草の葉このおつらと念むるとん玉枕を争う猪ひもひつ
 をかめより彼れの名もとまじきともまぬぬありとて女のま重ふ
 燭を扱てそれる癖者面をあびよと宣ふふる每恥
 めく大坊も額著動もえせ度とてよけ玉枕の前曾太郎とて
 ぬぐもいふ正五九月の己の日は欠さで請ふ女堂へ登のやど
 むとさひいふ今朝より分るのありていつらも暮せし
 身の癖も物体あり花裏のれが甲夜の間にまかんとさひい
 ると女子のそでに教護さふ曾太郎とて来てしらその癖者
 等か運の突か面よりやあび漬とも推せしるに只は初花に



辨天
鳴子
賢夫人
家法と
正く
と

半七

曾太郎

日本書紀

ちやくくよりすてふ云号て給奉の年季満るが婚姻とせり
 結せんと頼ごもの豫てより。准儀とせり。と頼つるに
 頼ご。いまだ君の免許とぬざれば夫婦ありと云ひがし。まも
 脱まぬ罪人たるがば。初夜に稚とせり。いづか使ふ女の子
 されば罪定んこと勿論る。半七のいふせん。頼も口は任せん。頼
 家の家したる曾太郎のいづか。いづか。いと憐む理非明白
 かる婦人の世は多く。有がたまでよ。頼の仰ありとも。恋は
 牙と悔いらむ。む。怪女見より。頼のいづか。面もくも。脱は
 身の恥と挿ふ。あまの袖の露胸とせり。寒うて畏りつる
 ぬら。貝く。曾太郎の塵うち拂ひて。膝に置巻と握り肘と
 頼ご。淫奔のいづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

武士の女見のいづか。あまのいづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

るんどの。女見の孫もあまのいづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

上ごのいづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

家の政事を奉る。親も。終て。憐む。主と。恋と。ぬ。大。膝。不。敬。

この年季の奉る。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

内居え。親の大難。その牙も。配所。あり。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

見の際。あ。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

ぬ。その牙を。八。裂。ふ。創。さ。る。も。て。も。親の恥。原。す。欲。賤。ふ。あ。

ぬ。も。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

熱て。怒。り。通。り。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

頼ご。四。翼。の。白。袴。も。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。いづか。

頼ご。理。遣。の。主。親。の。

仰へ重し身の怪みおぼせしや奉難し。頭を擡思ふる。身も
親の窮難にまゝ人へふ打忘まそ女子の伴ひゆらんや。まゝ
とも配所を裁てその下堂へ入り科の腹んとするとも腹
か。個初花の病と思ひ外文の厄難消除の爲に頼ぶこゝへ
詣る。おぼせしとこれと逢ぬ。せんがその罪も。まじり怪
やあらん。とらひつ傍を。人まじり初花と月を裁ひ。せぬ。お
過りの。まじりの裁度を許さる。彼首の恥を。せせて。腹
んせ。んと。天女と祈念。い。裁を。せ。ま。の。ら。舟中。入
寄。り。し。が。その。よう。い。び。ま。ま。い。と。い。つ。り。請。も。い。の。り。の。身。を
忘。る。も。親。の。為。を。初。花。と。い。ひ。り。が。初。花。を。罪。ま。り。せ。ま。せ
ぬ。を。許。す。の。り。の。初。花。の。女。子。の。の。り。の。怪。も。い。れ。の。り。の。輕。

只ませが首級切の助へん。この女子の。い。せ。も。果。で。曾。本。郎。ま。
血。ぐ。る。眼。も。声。も。尖。く。い。り。ま。じ。る。品。定。め。罪。輕。く。と。も。重。く。と。も。
賞。罰。の。君。の。隨。意。其。後。は。ま。ま。回。り。ん。や。後。密。金。せ。い。の。り。の。も。
柳下。惠。よ。あ。ら。う。せ。ば。い。つ。で。う。の。聽。こ。う。と。密。ま。海。婦。の。輕。重。ら
沙。汰。よ。及。び。覺。期。せ。の。り。の。罵。り。肩。衣。の。腹。引。短。く。形。を。改。め。
地。子。と。若。君。ま。人。へ。ま。じ。も。願。く。罪。人。お。次。曾。本。郎。よ。の。り。の。り。
ま。地。よ。首。級。切。ま。う。て。後。ま。の。裁。と。腹。報。知。ま。ん。偏。ま。許。さ。せ
ま。う。と。遮。裁。取。り。ま。ら。う。母。生。命。と。い。ま。い。と。ま。う。の。り。の。悲。し
玉。枕。前。の。り。の。い。ん。の。り。の。改。を。擡。ま。の。り。の。許。し。が。い。最。重。い
罪。人。の。の。り。の。場。と。ま。ら。せ。ま。刑。ま。る。と。繞。井。の。窮。風。ま。ら。う。の。り。の。擡。ま。ま
ま。の。り。の。の。り。の。ま。ら。う。ま。ら。う。の。り。の。女。の。下。堂。近。く。血。擡。ま。

その宗脱をばけん。よつてさふ。その罪人ホリてかかふ。その
 比ふ柴浸おせん。如此とる。たの家法を破る。は天女の中堂
 も穢さふ至らば。その首切ての徳りのごも。ハ幸死てあらん
 ぞん人死せんが君とあら。ま七初死が魂ごの代ふ。徳ん
 ううひのり。はホ真お海奪る。を現とる。城。別た
 諭。るのの。と憐へて。主。は。憐むよ。
 皇天つご。憐ららん。一目の恥辱と。魂。大和と。難と
 脱。代。風流士の。宝刀の。往方と。る。務めて。進。る。が。
 忠孝共。全。らん。そのと。死。と。舊悪の。浮。を。想。る。は。み。に。
 魂魄。再。び。入。る。一。死。の。終。居。る。因。を。て。い。づ。か。ら。月。と。日。を。
 百。日。十。日。累。も。風。流。士。と。素。出。て。暇。の。程。も。は。く。は。後。の。事。

汝ホ去と犯し。は水お洗ら。た。自。在。外。と。後。の。事。
 在所とあら。の。お。生。る。ま。一。の。幸。あ。ら。ば。又。ま。進。む。は。い。ま。
 とも。お。君。と。徳。あ。ら。う。て。聖。の。命。た。り。た。ら。ん。と。は。う。ら。う。と。は。し。ら。ん。
 彼ホが死。後。の。日。ハ。一。扇。の。同。向。し。も。は。う。ら。う。の。あ。ら。う。と。は。し。ら。ん。
 ま。せ。ま。衆。婢。ご。う。ら。う。や。と。誰。も。お。ひ。て。釋。は。る。律。の。宗。う。ら。の。
 る。母。身。と。締。る。思。義。あ。ら。う。面。り。折。る。う。ら。う。の。不。悔。よ。う。ら。う。
 ま。七。初。死。ご。う。ら。う。曾。左。郎。ハ。只。徳。貫。の。射。半。月。の。袖。お。威。候。と。
 畏。難。ま。列。居。る。女。房。達。ハ。女。の。童。ん。と。お。ま。の。終。共。よ。坐。む。
 袂。を。濡。し。り。且。し。玉。枕。中。前。ハ。女。の。重。お。齋。し。る。服。紗。物。を。用。て。
 蟻。松。よ。對。せ。の。い。や。曾。左。郎。例。の。て。辨。財。天。進。て。せん。と。痛。
 たる。向。銀。十。枚。ご。う。ら。う。ま。ん。れ。ども。罪。人。ハ。觸。し。れば。入。る。骨。の。末。指。を。

止めぬ人なり。この自浪由様と云ふ。彼亦水中へ沈みは壁石
うけてはもくもく水へ沈み。この自浪ハ究竟の壁石兩人が袂へ納め
て置。十萬徳土の遙き首途死す。冥土の路費も。め。ふ。い。い。い。
と外へ。法施の銀を曾太郎に。又宣ふ。彼亦既に罪
定まらぬ死するもの。異なる人。冥土の念よ。う。て。永。く。生。と
誓ふ。と云ふ。云号する婦人の縁。と云う生。結。び。果。は。未。来。孤。独。の
獄。鬼。と。う。の。あ。い。死。後。と。し。る。が。今。洋。と。婚。姻。の。盃。せ。が。三。三。九。品。の
洋。は。生。せん。その。沈。む。を。酒。は。擬。へ。親。も。許。し。て。召。さ。せ。よ。と。仰。せ。が
曾太郎の面を背け。鼻うらうら。這奴亦いつる。月と日の下
生。ま。り。て。か。く。ち。や。で。よ。高。い。思。惠。を。受。け。ら。ん。推。辞。を。も。ん。の。物。伴。は。
眞加よ。あ。さ。る。罪。人。の。あ。ら。ま。り。と。恋。ま。う。せ。が。腰。帯。の。中。に。あ。ら。ま。り。と。
沈。む。天。女。の。沈。む。の。洋。も。洋。柄。杓。と。長。柄。副。柄。も。て。婦。女。を。後。と
水。船。言。祝。せ。給。と。船。の。松。風。の。青。も。夜。の。深。し。玉。枕。を。尚。て。
現。か。つ。ら。げ。た。婦。女。が。て。て。迷。り。を。弘。果。と。召。さん。そ。も。曾。太。郎。長
兼。濟。一。と。更。則。と。う。この罪人亦。め。り。も。も。彼。知。の。者。も。沈。み。
殺。よ。と。う。ら。ん。の。和。形。の。巖。打。中。骨。を。碎。る。が。う。ら。ん。と。う。ら。ん。
舟。の。見。當。を。た。ぐ。る。と。仰。せ。ら。れ。彼。舟。よ。ま。せ。よ。と。う。ら。ん。と。う。ら。ん。
ま。り。私。の。自。浪。と。い。え。ん。と。初。老。の。う。ら。ん。仰。せ。ら。れ。て。も。の。り。後。共。
今。も。尊。大。主。と。親。と。は。辞。別。物。ひ。い。て。沈。む。と。云。え。よ。聖。持。舟。の。流。
籠。襟。上。左。右。は。描。廻。む。曾。太。郎。の。あ。ら。ま。り。岩。も。う。破。と。衝。き。ま。り。
底。も。う。船。の。中。自。浪。と。い。え。ん。と。投入。して。浪。の。ま。り。推。流。せ。が。玉。枕。は。
おん。声。さ。く。罪。人。亦。死。骸。浮。あ。ら。ま。り。再。び。岩。へ。ま。り。と。云。ん。曾。太。郎。

この夜の中水門を閉りて下狭川へ流し入れし。いそぎと徐
 中ふ床几とませのふみぞ。銀燭画燭續りて。子あくおる燈火
 冊く駭の女房より。前驅後後由嬭やふまゝるふびやく夜の
 中も強顔蛾松の易ぬ操ふる。浮世の藪や行極の機由指
 由隔極ど。闇の善悪多た船の中。月送るす七初花か火光月當ふ
 ふ一送と繋ぬ舟とゆく水の柱方へ更し定めろ移りて秋の夜長
 舞くまのぶし。

南柯後記卷之四終

和漢
 西洋
 書籍
 賞
 扱
 處

大阪心齋橋博愛町角

群玉堂河内屋
 岡田茂兵衛

122
 17
 21

122
17
24

